

大森藤ノ
©MORI FUJINO

ダンジョンに
出会いを求め
間違えるのは
どうだろうか
6



イラスト ヤスダスズヒト
YASUDA SUZUHITO

プロローグ 月 夜の福根

イラスト・デザイン
ヤスタススヒト

淡く輝く月に、雲がうつすらとかかっていた。
見上げれば吸い込まれそうな夜空には千切れた雲が散らばり、いくつもの星明かりを覆っている。

多くの者が寝静まる夜半。

冒険者達が酒盛りさけもりに耽り、眩く騒々しい都市の中心から離れた、薄暗い街並みの片隅。
闇夜に身を隠すように、とある建物へ忍び込んだ少女は、神との面会に臨んでいた。

「お願いいたします、ソーマ様。リリを、『ファミリア』から退団させてください……」
切願するその声は震えていた。

古びたロープで全身を隠す少女、リリは、跪いて深く頭を垂れている。円らな栗色の瞳は張り詰めており、床の一点のみを見つめていた。

彼女の声に向かう先、名を呼ばれた男神は、部屋の隅で膝を抱えている。

窓から月明かりが差し込む室内。壁の一面を覆う棚が設置されており、植物の苗、透明な酒瓶が置かれている。派閥の本拠、【ソーマ・ファミリア】を統べる主神の自室であった。

リリは派閥の移籍を申し込むべく、ソーマに謁見していた。

真の意味で派閥の呪縛から解放されるため——胸を張ってベル達の隣に並ぶため——彼女は頃合いを見て己が主神のもとへ足を運んだのである。

【ファミリア】から脱退——今もなお背中せなかに刻まれている『神の恩恵』を改宗コンバージョンするには、

主神であるソーマの協力が不可欠だ。

「音沙汰がなかったことも含め、数々のご無礼をお詫びします。ですが、どうか御慈悲を……」
顔を上げられず、目も合わせられず。

恐れ戦くように跪き身を小さくするその姿は、主神に対する潜在的な恐怖を物語っていた。自分を惑わせた『神酒』の魔力、そしてそれを作り出したソーマにリリは未だ怖気を拭えずにいる。

一方のソーマは、何の反応も示さなかった。

中背である、青年の神だ。体の線は細くどこか繊細そうな印象が見受けられる。ゆつたりとしたローブに似た服は、袖や裾の辺りが土色に薄汚れていた。

今は両膝を抱え床に座り込んだまま、壁に向かい「運営自粛……」「罰則……」「趣味が……」とぶつぶつと呟きを漏らしている。

全くまとめられていないぼさぼさの髪には瘴気が落ちており、長い前髪に埋もれる顔は明らかに気落ちしていた。

身じろぎ一つせず、リリに背中を晒し続ける始末だ。

「ソーマ様はお忙しい。話なら私が聞いてやろう、アーデ」

リリとソーマ以外の声が部屋に響く。

膝を抱え込んで動かない主神の側に立っているのは、ヒューマンの男性だった。

眼鏡をかけた細面は彫りが深い。黒い瞳は鋭く、理知人を気取っているが、隠し切れない嫌らしさが口もとの笑みから滲み出ている。

「しかし、お前が生きているとはなあ。カヌウからは死んだと報告されていたが？」
こぼれそうになる舌打ちをリリは口の中にとどめた。

ザニス・ルストラ。

【ソーマ・ファミリア】の団長にしてL.V.2の上級冒険者。

二つ名は、【酒守】。

ラシクツツ、昇格したことで『神酒』の魔力に振り回されない、強い心身を持つ。

碌に派閥を統率しない主神に代わって、彼が団員に指示を下すことは少なくない。むしろ团长という地位を用いて——主神の名を勝手に利用して——構成員を私利私欲のため操るのもざらだ。リリを巨大蟻の群れに投じて殺そうとした同僚と同じく、弱者から搾取してきた側の人間である。

今日まで己の死を偽装した上で、団員達に出くわさないよう人目を忍びソーマのもとへ訪れたというのに、最も見つかりたくない相手に見つかってしまった。

「そのカヌウ達もついこの間から消息を絶っているが……お前の仕業か？」

「……知りません」

依然薄笑いを浮かべている男の問いに、心当たりのないリリは正直に答える。

「……いままじましく思う感情が表れないよう苦心しつつ、声を抑え、目だけでザニスの方を窺った。

「ザニス様……リリの用件について、どうかソーマ様にお取り次ぎを」

「ああ、そうだったな、話を戻そう」

鷹揚に鎮くザニスはどこか芝居じみた動きで、ゆっくりと次の言葉を告げた。

「退団についてだが、無論代償が無くとは言えん。ここまでお前を育ててくださったソーマ様に報いるためにも——一〇〇〇万ヴァリス、といったところだろう」

リリは最初の数秒、体の動きを止めた。

ザニスの言葉を理解した後、大きく息を呑む。

「ソーマ様、いかがでしょうか？」

「……任せる」

振り向きも、一瞥もせず、壁に投げればはね返ってくる石のように、ソーマはザニスの声に答えた。

「い、一〇〇〇万……」

その決定に、リリは青ざめると同時に言葉を失う。

己の内に埋没している主神の耳に、自分の呼びかけは届かない。くつくつと笑いながらこちらを見下ろしてくるザニスなど、もとより抗議を行う意味がない。

糸の切れた人形のように小さな体から力が抜ける。床へと崩れ落ちるのを細い腕が何とか堪

え、リリは長い時間をかけた後、立ち上がった。
 「顔から生気を失い、頼りない足取りでふらつきながら、ソーマの自室を後にする。
 開放された両扉から出ていく少女の姿に、ザニスは口端を吊り上げた。
 それから間もなくして。

リリと入れ替わるように、大柄な人物が入室してくる。

「おい、アポロンの奴等が来たぞ」

大きな瓢箪ひょうたんを腰にくくりつけた、無愛想みあいそうのドワーフだった。
 碌ろくに視線を合わせず、ぞんざいな態度でザニスへ声を投じる。

「ごころう、チャンドラ。裏手の小部屋に案内してくれ」

「知らん。自分でやれ」

チャンドラと呼ばれたドワーフは、仏頂面で言い返して背を向ける。

無用な会話を嫌うように廊下の奥へ消える彼に、ザニスはやれやれと肩を竦すくめた。
 振り返り、主神の背へ声をかける。

「ではソーマ様、自分が交渉に赴きます。よろしいですか？」

「……任せる」

全く関心のないソーマの声音に、ザニスは小さく、鼻先で笑った。
 瞳の奥に嘲あざけりを隠しながら身を翻ひるがえす。

扉を閉める音が鳴った後、部屋は静寂に包まれた。

「……」

取り残された男神は、おもむろに、ぶつぶつと重ねていた独り言を止める。
 月の光を浴びる植物が藍色に染まる中、棚から酒瓶を取り出し、蓋を開けた。
 そして、なみなみとそそがれた杯さかづきを、くいっ、とあおいだ。



うらかな日差しが整然とした石畳を照らしている。
 今日も晴れ晴れとした天気、街行く人達の顔には笑みが咲き、弾んだ声を通りのそこから中に溢れている。亜人^{マヒューマン}や馬車の交通は既に盛んで、広いメインストリートには街の住人や旅装を纏った旅人達の姿が入り交じっていた。

人波と大通りが続く先、都市の中心では、壮大で美しい白亜の巨塔が青空の奥から僕達のことを見下ろしている。

「でも本当に、ベルさん達が無事に帰ってきてくれて良かったです」

「その、ご心配おかけしました……あと、ありがとうございます」

西のメインストリートの一角、酒場『豊穣の女主人』の側で、僕はシルさんに何度目とも知れない謝罪と、感謝の言葉を送っていた。頭の後ろでまとめた薄鈍色の髪を揺らすシルさんは、18階層から生還した僕達のことを心から喜んでくれている。

階層主を倒し、地上に戻ってから、既に三日が経とうとしていた。

『中層』の脱出に失敗し18階層まで避難する羽目になったのが一週間前。当時、地上では、沢山の人が僕達の安否に心配を募らせていたらしい。目の前のシルさんもそれは同じで、自らダンジョンまで来てくださった神様達と方法は違えど、同僚のリュウさんを送り出し、助けの手を差し伸べてくれたのだ。

エルフである彼女に散々救われたこちらとしては、感謝の念がつきることはない。

勿論、そんなシルさんの思いやりに対する嬉しさも。

目の前の笑顔に、僕は照れくささを誤魔化すように苦笑を浮かべた。

「お体の調子は、もう大丈夫なんですか？」

「はい。ミアハ様……良くしてもらっている【ファミリア】の人達に、治療してもらったので」

ミアハ様とナーザさんの特製の薬草や回復薬のおかげで、戦いの中で負った怪我や体力、精神力もこの三日間の内にすっかり回復している。

階層主を撃破した翌日に地上へ帰還、そして中二日を休息に費やした僕は、こうして折を見ては無事帰ってきたという連絡を知り合いの人達に行なっていた。自分の足で直接会いに行つて、安心されたり、怒られたり、笑われたり、色々。ちなみに、シルさんには帰ってきてすぐ顔を見せにいったから、こうして喜ばれるのは実は二回目だったりする。

太陽の光が届く地上に、明るい日常に戻ってきたのだと……こうしてシルさん達と再会できようやく実感することができた。多くの不安と身の危険に晒された分、嬉しさもひととおというか。

本当に、帰ってこれたんだ。

通りを行く賑やかな雑踏に囲まれながら、頬が緩んでしまうのがわかった。

「シル、店を空けるとまたミア母さんに……ああ、クラネルさん、いらっしやっただんですか」

「リユーさん」

酒場からシルさん呼びに、リユーさんが出てきた。おはようございます、と挨拶すると彼女も、おはようございます、と律儀に返してくれる。

ダンジョンにもぐっていた時のケーブと戦闘衣を脱ぎ去り、代わりに店の制服を着こなすその姿は、今やもうすっかり酒場の店員だ。あの強くて綺麗だった覆面の冒険者を知ることらとしては……その可愛らしくもあるウエイトレスの格好に、ずれというか、ちょっと不思議な感じも覚えてしまう。

「壮健そうで何よりです。ダンジョンから帰還する際、貴方はずっと死人のような顔をしていたので、心配していました」

「あ、あの時は、すいませんでした……」

色々無茶をやらかして、帰還時はお荷物状態だったことを詫びると、彼女は「いえ」と小さく首を振った。肉付きの薄い唇が、ほのかに和らげられている。

……何となくだけど、リユーさんとの距離が近くなったような、そんな気がする。どこか優しく聞こえる声音とか、以前より柔らかく見える表情とか、本当にぱっと感じた程度のもので、けど。

短い間だったけれど、ダンジョンの中で協力し合えたことは、彼女に歩み寄れる切っかけになったのだろうか。

「……ベルさん、リユーと随分仲良くなりましたんですね？」

「は、はい？」

「でも、覗きなんてしたらいけませんよ？」

「は、はいっ……！」

じーと見つめた後、指を上げてずいっと詰め寄ってくるシルさん。

彼女の注意に、呻くような返事をする。ことしかできない。

最初に帰還の報告をしに向かった時、例の覗きの件をしつかり聞き出していたらしいシルさんは、その……リユーさんの裸を見てしまった僕を、それはこっぴどく叱ってきた。というより、折檻された。

あんなに怒ったシルさんの姿は未だかつて見たことがない。年上である彼女の説教は、僕を萎縮させるには十分だったのだ。いや、自業自得に違いはないけれど……。

自分ののでかしたことへの羞恥と反省で顔を赤らめつつ、僕は体を小さくした。

「シル、あれは事故だ。クラネルさんを責めないでください」

「もう、リユーったら、どうして事故って言い切れるの？」

「もし邪念を抱いていたなら、私がある場で斬り伏せていた」

——もう二度と過ちを犯してはいけないと、斬殺を恐れる僕は心に固く誓った。

「リユーに話を聞いたんですけど、すごい怪物と戦ったんですね？」

笑みを引きつらせていると、シルさんが不意に尋ねてくる。

18階層に突如として現れた『ゴライアス』のことだとわかり、「あ、はい」と答えた。

「ベルさんが倒されたと聞きましたが、本当ですか？」

「えっ、いや、あれは……」

咄嗟に否定の言葉が出かけて、けれどリユーさんの『謙遜しないでください』という眼差しに僕は声を呑み込んだ。自分を貶めるような真似はするな、というあの水浴びの時にかけられた言葉を思い出し……きこちなく、シルさんの問いに頷いておく。

「わあ、すごい！ ベルさん、本当に一人前の冒険者様になってしまったんですね！」

「ん、と……」

ぱんつ、と両手を叩いて興奮で頬を染めるシルさんに、苦笑することしかできない。

誉めてくれる声やその尊敬の眼差しは、とても気持ち良くて、嬉しかったけれど、自信をもって胸を張ることは難しかった。

賭けてもいい。

あの戦場で共闘していた誰か一人でも欠けていたら、僕はここにいなかったと思う。

【英雄願望】のおかげで止めこそ刺せたけれど、一撃を放つまで無防備だった僕を庇ってにくれたのは、他ならないリユーさん達だ。階層主はもとより、周囲にいたモンスター群れの襲われれば一溜りもなかった筈。

沢山の人達に守られて、助けられて。

【ファミリア】の垣根を越えて一致団結できたからこそ、勝利をもぎ取ることができたのだ。全員の力で倒した、と言った方が正しいに違いないだろう。

「酒場のお客様が有名になられるなんて、何だか私まで誇らしくなってしまうです」

そんな僕を他所に、シルさんは自分のことのように喜んでた。

細められる瞳とその微笑みにくすぐったいものを覚えていると、彼女は言葉を続ける。

「良かったら、またお祝いをしましょうか？ せっかくみなさん、無事に帰ってこれたんですから。今日のご夕飯なんていかががでしよう？」

以前開いた昇格の祝賀会に続いて、そんな提案をされた。

純粹な善意はありがたかったけど……頭の中にとある人物がぱっと思いつかなくて、僕はつい遠慮気味な答えを返す。

「いや、流石に迷惑をかけてお祝いするのは……その、ミアさんに合わせる顔がないというか……」

酒場の女将であるミアさんは、僕達を搜索するため断りなく出ていったリユーさんに大層立腹だったらしい。所属派閥以外の人達にわざわざ助けてもらった僕のことでも『甘えてんじゃないよ』と厳しく罵っていた。

脳裏に浮かぶミアさんの怒った顔が怖くて、情けなく尻込みしてしまう。

「ふふつ、お土産話を差し出せば、ミアお母さんもきつと機嫌が良くなると思いますよ?」
 「確かに、冒険者の武勇伝は彼女の好物です」

そんな僕を見てシルさんはおかしそうに微笑み、リユーさんも淡々と説明を補足する。
 どうでしょう? と優しく尋ねてくるシルさんの気持ちに感謝と、そして申し訳なさを覚え
 つつ、僕はそのお誘いを辞退させてもらった。

「ごめんなさい、今回は遠慮させていただきます。今日の夜は、ちょっと予定があつて……」

「あ、そうだったんですか?」

「クラネルさん、それはもしや、アーデさん達ですか?」

はい、と少々の嬉しさを滲ませながら頷く。

リユーさんの言う通り、今日は仲間との先約があるのだ。



高い市壁の先で日没が終わり、都市は蒼い闇に覆われる。

夜を迎えたオラリオは騒がしさが増していた。

酒場や広場から流れてくる陽気な歌声と弾奏。街のあちこちで魔石街灯が発光し、迷宮帰りの冒険者を加えた通りは人込みで溢れ返っている。

特に、南のメインストリートに位置する繁華街は一層騒々しい。

色とりどりの灯りが大通りを照らし出し、星々に負けないほどの光を放っている。目抜き通りに軒を連ねる店は全て高く、大きく、外観は豪華で派手派手しい。貴族が利用するような高級酒場や賭博場、大劇場など、都市の他の場所ではお目にかかれない施設まで数多く建っている。盛り場の名に相応しく、南のメインストリートは非常に混雑していた。

そんな大通りから折れた、路地裏の一角。

鳥や獅子など、様々な動物を象った看板が立ち並んでいる酒場の一つで、僕とリリ、そしてヴェルフは、ジョッキとグラスを掲げて重ね合った。

「乾杯!」

笑みと一緒にエールの泡が弾け、ジョッキからお酒がこぼれ落ちる。僕達の声にあたかも随伴するように、周囲で騒ぐ冒険者達のテーブルからも、ガチン、ガチン! とグラスを叩き合う音が鳴った。

【ファミリア】のエンブレムとも似た、真つ赤な蜂の看板を飾る酒場『焔蜂亭』。繁華街の裏道にたたずんでいるこのお店は、ヴェルフ行きつけの酒場らしく、一部の冒険者や鍛冶師にはとても人気があるそうだ。店の名物——まるで紅玉を煮詰めたかのような真つ赤な蜂蜜酒——の虜になってしまい、連日通う人達も多いらしい。

路地裏のお店だけあって、『豊穰の女主人』より店内は少々狭苦しいだろうか。けれど移動

に苦勞するほどの沢山の丸テーブルや、小汚い店の内装、そしてドワーフを始めとした男の人達が笑い合う大声さえも、妙に心を浮き立たせるから不思議だ。お洒落なシルさん達のお店と比べて、これぞ冒険者の酒場、という感じがする。

小人族の給仕がちよろちよると動き回る中、僕とリリは対面のヴェルフに笑いかけた。

「【ランクアップ】おめでとう、ヴェルフ！」

「これで晴れて上級鍛冶師、ですな」

「ああ……ありがとうな」

普段は見せないような、はにかんだ仕草をするヴェルフ。口もとからこぼれ落ちる笑みは、目標叶って喜びが抑えられない証拠だ。

先日の中層での強行軍や18階層の度重なる戦闘を経て、ヴェルフはどうとう【ランクアップ】——Lv.1からLv.2に到達するに至った。伴って、『鍛冶』の発展アビリティ習得も。ヘファイストス様に【ステイタス】の更新を施され、【ランクアップ】が判明したのが今日の朝。ヴェルフはいの一番に僕と神様がいるホームに駆けつけ、笑顔でその一報を報せに来てくれた。すぐにリリにも報告して、こうして三人で祝賀会を開くことを決めたのである。

念願の上級鍛冶師の仲間入りを果たした、ヴェルフのお祝いだ。

「これでヴェルフ様は、【ファミリア】のブランド名を自由に使うことができますのですか？」

「自由に、とはいかない。少なくとも文字列を入れられるのは、ヘファイストス様や幹部連中

が認めた武器だけだ。下手な作品を世に出して、あの女神の名を汚せないしな」

上級鍛冶師の末席に名を連ねたヴェルフは、同時に【Honors】の名を武器に刻むことを許された。

本人が語ったように、全ての武器に刻めるわけではないようだけど……恐らく、いやきつとヴェルフの作品はこれから飛ぶように売れるだろう。それだけ【Honors】のブランド名は大きい。

上級鍛冶師の作品というだけでも十分な価値があるのだ、今回の昇格が公式で発表されれば、ヴェルフの鍛冶師としての名は一気に広まる筈。

大切な仲間の朗報を喜んで祝いつつ、僕は、少し残念そうな笑みを浮かべてしまった。

「でもこれ……パーティ解消、だよな？」

ヴェルフが僕達のパーティに入ってくれたのは、『鍛冶』のアビリティを手に入れるためだ。上級鍛冶師になった今、約束の期限はもう切れてしまっている。

ヴェルフにも目標がある、自分勝手に引き止めることなんてできない。

僕が寂しさを堪え、リリも困ったように口を噤んでいると……ヴェルフは手で後頭部をかく。まるで弟の面倒を見る長兄のように、そしてどこか照れを隠すように、苦笑していた。

「そんな捨てられた兎みたいな顔するな」

ジョッキを手で軽く回しながら、ヴェルフは言葉を続ける。

「お前達は恩人だ。用が済んで、じゃあサヨナラ、なんて言わないぞ」
「えっ……」

「呼びかけてくれればいつでも飛んで行って、これからもダンジョンにもぐってやる」
だから心配するな、とヴェルフは快活に笑った。

目を丸くしていた僕は、その笑みに釣られて破顔する。リリも隣で目を細める中、もう一度
笑い合って、三つの杯を打ち付けた。

僕達のパーティは、まだ続けられるのだ。

「それにしても、ヴェルフ様がパーティに加わって二週間……【ランクアップ】するのもあつ
という間でしたね。リリはもつと時間がかかると思っていました」

「お前達と組むまで、それなりに修羅場はくぐってきたつもりだからな。確かにここまでくる
とは俺も思ってたが……【中層】で五回は死にかけたし、な」

「あはは……」

酒場の喧騒に包まれる中、僕達も気の赴くまま会話に興じた。

その間に料理はどんどんと運ばれてきて、焦げ目のついた厚切りのハムステーキや、香草の
ソースを加えた鯛の蒸し焼きが湯気を振りまく。例の真っ赤な蜂蜜酒を一口飲んでみると、た
ちまち喉とお腹がかあ〜と熱くなった。ヴェルフの提案でこの「焔蜂亭」を祝いの席に選ん
だけれど、勧められただけあって料理や飲み物はとても美味しい。「豊穣の女主人」と甲乙付

けがたいほどだ。……料金は、こっちの方が安いかな？

ちなみに、神様も最初はしつかりこの祝賀会に参加しようとしていた。ただ「間違っても付
いていくんじゃないわよ」とヴェルフの口づてにへフェイス様から釘を刺されてしま
い……今日も泣く泣く摩天楼施設の支店でバイト中だ。落ち込んだ表情で祝いの言葉を贈られ
たヴェルフも、流石に苦笑いしていたっけ。

「ベルは【ランクアップ】しなかったのか？」

「うん、僕はまだ」

ヴェルフから話を振られ、素直に答えた。

中層にとどまった約四日間、能力値こそ大幅な進捗があったものの、僕の【ステータス】は
次の段階に至っていない。

「Lv.1とLv.2では獲得する【経験値】の基準も、昇格に必要な総量も違うのでしょう
が……まあ、最後の戦闘に限っては、ほぼリユール様の総取りでしょうからね」

素性がバレないよう「魔法」で狼人の子供に変身しているリリが、獣耳をびよこびよこ揺
らしながら口にする。僕もその指摘には同意見だ。

最後の戦闘……階層主との決戦。

僕達とはとより「リヴィラの街」の冒険者も加わって行われた階層主の攻略は、直接「ゴラ
イアス」と攻防を繰り返した人だけでも百人は超えていた。召喚されたモンスターの大群を受

け持つてくれた人達も合わせれば、あの戦いに身を投じた冒険者は、恐らく五百人にも上るだろう。

集団戦の法則により、手に入る【経験値】は戦闘に参加した者の間で分散する。中でも、ゴライアスを食い止めるため命懸けの近接戦闘を仕掛け続けていたアスフィさんとリユーさん——とりわけリユーさんの活躍は著しく評価された筈だ。階層主との交戦で発生した【経験値】の大半は彼女のものになったに違いない。

ヴェルフ達がいなければ最後の一撃を与えられなかった僕とは違う、完璧な独力。仲間を庇うため巨大な怪物をたつた一人で迎え撃つ……英雄譚の一場面にも迫るその偉勳に、今更ながら畏怖を覚える。当時のリユーさんの戦いっぷりを鮮明に思い出す僕は、ぶるつと肩を震わせた。

「……結局、何だったんだ、あのゴライアスは？」

階層主の話題を受けてか、ヴェルフが安全階層で直面したあの異常事態について言及する。

例の事件を振り返る僕達は、自然に顔を寄せ合い、周りに聞こえないよう声をひそめた。

「異常事態としか言いようがありませんが……間違はなく前代未聞でしょう、安全階層に階層主が産まれ落ちるなんて」

「能力も普通の階層主より上だったんだらう？ 上級冒険者が虫みたいに吹っ飛んでたぞ。あんなことがこれからも続くようなら、命がいくらあつても足りない」

「そう、だよね……」

漆黒の階層主。強化を施された『迷宮の孤王』。

本来出現する階層を無視し、僕達を絶望のどん底にまで陥れたあの存在は、全てが規格外と言っている。

異常事態という言葉だけで片付けるには、深刻過ぎるほどに。

「ヘステイア様は何か知っていたようですが……」

神を抹殺するために用意された——あの黒いゴライアスを見て、神様はそうおっしゃった。ダンジョンが神様達の存在に感づいて刺客を放った。

また、存在を察知されないように神様達は原則ダンジョンにもぐらない。

ヘステイア様の発言から読み取れるこれらの情報だけを見ると、神様達とダンジョンの間に何か因縁めいたものを憶測せずにはいられない。やはり全知全能である神様達はダンジョンについて何か知っているのではないか、という意見を僕は共有した。

「何か教えてもらえましたか？」とこちらを見やるリリに、僕は軽く頭を振った。あの戦いの後、神様は謝罪しつつも直接の原因については話題を避けている。

聞いてはいけないという言外 of 意思表示、他ならない神様の神意に逆らうことはできず……歯がゆい思いは確かに感じている。

けれど、教えたくない、いや教える必要がない。

そんな雰囲気があると、僕は受け取った。

ダンジョンの『未知』を解き明かすことは、僕達、冒険者の役割なのかもしれない。口を閉ざす神様の姿を見て、僕は一人、そんなことを思ってしまったのだ。

「ま、これ以上は話してもしょうがないか……世間の方は今どうなっているんだ？」
空気を入れ替えるように、ヴェルフが言葉を投げかけてくる。

事件の後始末や現在の状況について、僕達は情報交換を始めた。

「ギルドが真つ先に箱口令を敷きましたから、都市や冒険者の間で目立った混乱はないみたいですね。詳細を知っているのは、当事者であるリリ達だけでしょう」

「絶対口外するな、って徹底されたし……」

「罰則も厭わない、って確かに鬼気迫っていたな、ギルドの連中は」

「18階層の『リヴィラの街』は既に機能を取り戻しているそうです。ダンジョンもあれから変わった動きはなく、平常通りだと」

盗賊業をやっていたこともあり情報には敏感なのか、耳聡いリリがほとんどの現状報告をしていく。

今のところ都市とダンジョンは常の様相を取り戻しつつあるらしい。ギルドが混乱を防ぐため尽力したということでもあるんだらうけど——冒険者を動揺させて最も痛手を負うのは、迷宮の資源から利益を得て都市を管理している他ならないギルドだ——。

それにしても、『リヴィラの街』にはもう街の住人達が戻っているのか。かなり危険な目に遭っただけで、怖いもの知らずというか、商人魂が激しいというか、何というか……。

「そういうえば、ベル様達は大丈夫なですか？ ギルドに言いがかりをつけられて、罰則を課せられたと聞きましたか？」

「あー、うん……」

正確には、僕達の【ファミリア】と、ヘルメス様の【ファミリア】だ。

今回の事件の事情聴取に際して、ヘステティア様とヘルメス様はギルドに強制召喚された。そして雷が落ちたらしい。

訳を説明しようとしても一切取り合ってもらえず、今回の事件の発端は『神災』——神様達が原因であると断定され、激しい警告とともに、容赦のない罰則を頂いたのだ。

罰則の内容は……罰金。

「罰金の額はおいくらだったんですか？」

「えっと……【ファミリア】の資産の、半分」

「……キツイな」

むしろ、僕達の方はまだマシだった。

発展途上、というより零細である【ヘステティア・ファミリア】の貯金は正直たかが知れていて、数十万ほどで済んだ——それでも大金だけ——。

階層主戦で発生したドロップアイテム『ゴライアスの硬皮』も、熱狂していたあの場の乗りで受け取れと押し付けられてしまったので……取り返せる目処は一応あるのだ。金貨が詰まった大袋をギルドに提出する神様は、ぐぬぬぬつ、と震えていたけど。

一方で、ヘルメス様達は悲惨だった。

派閥の規模が大きい【ヘルメス・ファミリア】は結構なお金の蓄えがあったらしく、僕達とは比べ物にならないほどの金額を請求されたのだ。真っ白に固まって力なく笑うヘルメス様のご尊顔がまだ忘れられない。アスフイさんは溜息をついていたけど。

罰則の内容を聞いて呻くヴェルフに、僕も空笑いしか返せなかつた。

「……」

それからしばらく、客の賑やかな大笑の声に囲まれながら、料理を楽しんでいると。

僕はふと、隣で黙り込んでいるリリの姿が気になった。

「リリ……大丈夫？」

さつきから、様子がおかしいような気がする。

目を離すと、時折物憂げな表情を浮かべていて……何だろう、必死に目を背けているけど、リリの心はここじゃないどこかに引っ張られているような。

心配になった僕が声をかけると、リリは「すいません、ぼーっとしていました」とにこやかに、あるいは誤魔化すように笑った。

「ベル様も、先日の事件で随分株が上がったことだと思えます。少なくともあの階層主攻略に参加した冒険者達には、認めてもらったのではないのでしょうか？」

「う、うん……」

話題を逸らされたことが気になりつつ、曖昧に頷く。

ちらと反対側を見ると、ヴェルフも気付いているようだった。口をつけているジョッキの奥から、リリの横顔を凝視している。ジョッキをテーブルに置くと目を合わせて、今は探っても無駄だろう、と肩を練める素振りをした。

ぱたぱたと尻尾を揺らし、明るく振る舞う獣人姿のリリに、僕もそう思ってしまった。

「——何だ何だ、どこぞの『鬼』が一丁前に有名になったなんて聞こえてくるぞ！」

と、そこに、聞こえよがしに大声が。

僕達の真隣に陣取っていた冒険者達の方からだ。

六人がけのテーブルに座っている内の小人族の冒険者が、杯を片手に叫んでいる。

「新人は怖いものなしでいいご身分だなあ！ 世界最速鬼といい、嘘もインチキもやりたい放題だ、オイラは恥ずかしくて真似できねえよ！」

幼い少年のような声音が、騒々しい酒場の隅々まで響いていく。周りの客の視線が集まる中、僕やヴェルフ達も隣の冒険者達に向かった。

金の弓矢に燃える球体……いや、輝く太陽を刻んだエンブレム。

小人族の冒険者も含めた六人の冒険者達の肩には、服の上から【ファミリア】の徽章が貼り付けられている。他派閥の構成員達だ。

椅子の背もたれに体を預ける小人族の男性は、ぐいっとお酒をあおり、啞然としてしまっている僕を見てせせら笑った。

「ああ、でも逃げ足だけは本物らしいな。昇格できたのも、ちびりながらミノタウロスから逃げお世話だからだろう？ 流石『兎』だ、立派な才能だぜ！」

冷やかしか、それとも侮蔑なのか。

大きな目が特徴的な小人族の冒険者は、恐らく、わざと、僕に聞こえるよう嘲りの言葉を連ねた。テーブルに腰を下ろしている冒険者の仲間も彼を止めず、面白そうにこちらを見やっっている。

気持ちの良いものでは勿論なかったけど……口を閉じた。

派閥同士の揉め事は避けた方がいい。【ファミリア】の規則を入団直後から神様やエイナさんに教え込まれている僕は、素直にその言い付けに従う。

それに、怒る踏ん切りも、言い返せる勇氣も、情けないけれど今の僕にはなかった。

ともすれば挑発にも聞こえる笑い声に、居心地が悪くなりつつも意識しないよう努力する。何かを期待していたのか、僕達を見守る周囲の冒険者達が、若干白けるのがわかった。

「オイラ、知ってるぜ！ 『兎』は他派閥の連中とつるんでるんだ！ 売れない下つ端の

鍛冶師にガキのサポーター、寄せ集めの凸凹パーティーだ！」

しかし、僕が隣のテーブルに背を向けると、矛先はヴェルフとリリにも向かった。調子の良い幼い声に、くっくっつと男の仲間が喉を鳴らす。

ぴくり、と肩が震えた。

無視ができない言葉。仲間を馬鹿にされたことに対し、両手が不自然に力んでしまう。

背後を一瞥してしまふ僕の反応に、ヴェルフ達は同時に口を開いた。

「よせ、構うな。気が済むまで言わせてやれ」

「べル様、無視してください」

余裕そうにお酒を飲みながらヴェルフが、嗜めるようにリリが注意してくる。

久しぶりに胸の中に生まれた赤い感情を、二人の言葉を聞いた僕は自制した。

飲んだお酒と場の雰囲気、少し、酔っているのかもしれない。そう自分に言い聞かせて、落ち着くよう息を軽く吸い込んだ。

そして、無視の姿勢を貫く僕達が癪に障ったのか、小人族の冒険者から大きな舌打ちの音が響く。

次には、彼は声を荒らげた。

「威厳も尊厳もない女神が率いる【ファミリア】なんてたかが知れているだろうな！ きつと主神が落ちこぼれだから、眷族も腰抜けなんだ!!」

——瞬間、視界に火花が弾けた。
椅子を勢いよく飛ばして、立ち上がる。

「取り消せ!!」
吠えた。

我を忘れて、あらん限りに叫んだ。

椅子が大きな音を立て倒れる中、小人族の男を睨み付ける。

すぐ隣で、リリが言葉を失っているのがわかった。それほどまでに、僕は怒っている。神様を——尊崇する己の主神を侮辱された。これ以上に屈辱的で激しい怒りを覚える事柄なんて存在しない。大切な家族でもあるあの神のことを、目の前の人物は暴言を吐いて、貶めたのだ。

束の間酒場は静まり返っていた。僕の剣幕に小さな体を跳ねさせた小人族の男は、怖気付いたのか、目に見えて怯えた素振りを見せる。

けれど何とか嘲笑を纏い直し、震える声で続ける。

「ず、凶星かよっ。あんなチビの女神が主神で、恥ずかしくて堪らないだろう?」
かつつ、と頭に血が上がった。

抗うことのできない感情の波が、全身を突き動かす。

「いけません、ベル様!」

リリの制止の声も振り払い、目の前の相手に掴みかかろうとする。

そして僕の手が小人族の冒険者に触れようとした——その直前。

突如横から伸びた足が、ドゴツツ、と小人族の男の顔面にめり込んだ。
「ぶびっ!」

潰れた悲鳴を上げて、小人族の冒険者が、椅子ごとひっくり返る。

床に放り出された彼は鼻血を流し、白目を剥いて、びくびくと痙攣しながら気絶していた。

しん、と今度こそ完全に酒場が沈黙する中、前蹴りを放った張本人、僕の役目を横取りしたヴェルフは。

左足を伸ばした姿勢のまま、周囲の視線を一身に浴びていた。

こちらを庇ったのか、もしくはとつくに憤っていたのか。

呆然とする僕を他所に、ヴェルフはふてぶてしく告げる。

「足が滑った」

目を細め、不敵な笑みを浮かべるヴェルフの行動が合図だったかのように。

小人族の仲間は一斉に立ち上がる。

「てめえ!」

「やりやがったな!!」

相手の冒険者達にテーブルが蹴り上げられ、宙を舞う。瞬く間に響き渡る皿が割れる音と給

仕の悲鳴。邪魔な障害物を取り払って一直線に迫った相手に対し、ヴェルフは好戦的な笑みを浮かべたまま、豪快に右腕を振り抜いて殴り飛ばした。

一瞬置いてけぼりを食らった僕も、ヴェルフを横から襲おうとする冒険者を見るなり体当たりを敢行する。

——わっつ!! と周囲の客が総立ちして、凄まじい歓声を上げた。

「ああもうっ、これだから冒険者は！」

狭い酒場が熱狂に包まれる。リリが非難の声を上げる中、拳が、蹴りが、何度も飛んだ。

巻き起こる大乱闘。周囲のテーブルと椅子を手当たり次第にひっくり返す相手の冒険者、そして応戦する僕達に、同じく冒険者である客はこれ以上のない昂りを見せる。片手に持つて振り上げられる酒瓶やジョッキ、声援とも知れない野太い大声、彼等が周囲を取り巻くことであつという間に狭い喧嘩場がで上がった。

夜の闇も吹き飛ばす熱気に囲まれながら、相手を往なしては反撃を見舞う。Lv.2になつたヴェルフは喧嘩慣れもしているのか、向かつてくる四人の冒険者相手に見事な立ち回りを演じた。飛びかかる冒険者達が面白いように弾き飛ばされる。僕もその動きに便乗しながら素早く屈み込み、床に手をつけて足払い。獣人の冒険者が「ギャン!!」と盛大な尻もちをつく。

攻撃が何度も体を掠めながらも、曲がりなりに前衛と中衛を務める僕達の連携は、相手を圧倒していった。

「……」

二対四の取っ組み合いが過熱し、客の興奮もうなぎ昇りになっていく一方。

六人組である小人族の仲間——その最後の一人が、動いた。

椅子に座ったままお酒の残りを飲み干すと、グラスを床に放り投げ、立ち上がる。流麗な動きで——かつ意識を割いていた筈の僕の反応が遅れるほどの速さで——ヴェルフに接近した。

別の相手に殴りかかっていたその腕を取り、片手だけで、逆方向へ投げ飛ばす。

「うおっ!!」

「ヴェルフ!」

床に叩きつけられた仲間の姿を見て、僕は相手に向かって正面から挑んだ。

拳を握り締めながら突っ込むと——見えたのは冷やかな笑み。

次には目の前にあつた敵の体がぶれ、あつさりと、僕の突撃は躲かれてしまう。

「——」

足の速さだけには自信があつた僕を、嘲笑うかのような素早い身のこなし。

体が前のめりに流れ戦慄していると、腹を途轍もない衝撃が襲う。両目を限界まで見開きながら、すれ違いざま膝を打ち込まれたことを理解した。

地面から僅かに浮いた僕の体は、肩を掴まれ、そこから強引に振り向かされる。

そして視界一杯に迫つた拳が、顔面へと叩き込まれた。

「バル様!」

真後ろに殴り飛ばされる。

観戦していた冒険者の人垣がばつと割れ、背後にあった丸テーブルへ突っ込んだ。リリの悲鳴と一緒に、僕を受け止めた木製の卓と脚が派手な音を立てて壊れる。

顔の中心が熱い。仰向けに倒れ込んだまま、だくだくと流れる鼻血を片手で押さえ、僕は何とか首を持ち上げる。

「まだ、撫でただけだぞ?」

割れている人垣の向こう、彼は悠然とたたずんでいた。

細身で、長身の冒険者。

エルフにも負けない、美青年のヒューマン。

茶色の髪は品良く纏められていて、色白の肌は女性のようにきめ細かい。金属のイヤリングを始めとした、様々な冒険者用装身具を派閥の制服の上に身に付けている。瞳は深い海のような碧眼だ。

『あいつ……ヒュアキントスだ』

『太陽の光寵童』……』

『Lv.3の第二級冒険者様かよ』

ざわざわと揺れる周囲の喧騒から、断片的な言葉が転がり落ちてくる。その中でも無視でき

ない情報が耳に飛び込んできた。

Lv.3——第二級冒険者。

つまり僕よりも一段上の高みにいる、上級冒険者。

「よくも暴れてくれたな、【リトル・ルーキー】」

ヒュアキントス、と呼ばれた青年は、男性にしては高い声音で喋りかけてくる。

彼の青い瞳が、気絶している小人族の男、そして倒れ伏せ呻いている仲間の姿をなぞった。今やこの酒場で立っていられている騒動の当事者は彼だけだ。

リリが慌てて駆け寄ってくるけれど、手を借りたところで震える体は満足に立ち上がれない。ヴェルフは膝をついて身を起こすも、青年の無言の圧力によって不用意に動けずにいる。

血に濡れた顔を歪める僕を、青年は髪をかき上げて見下ろしてきた。

「我々の仲間を傷付けた罪は重い……相応の報いは受けてもらおうぞ」

細められた美しい碧眼の奥で、嗜虐的な光が瞬くのを僕は確かに見た。

そして冷笑を湛える彼が、僕に追い打ちをかけようと一歩踏み出した、その時だった。

木を蹴り砕くような音が、高々と鳴り響いたのは。

「!」

酒場にいた人達が一斉に振り返る。

僕達の視線の先にいたのは……椅子に座りながらテーブルを蹴り倒した、灰色の毛並みを持

つ狼人の青年だった。

「揃いも揃って、雑魚が騒いでんじゃねえよ」

乱暴な口調と合わさるように、顔に刻まれた青い刺青が歪む。

獸の耳と尾から機嫌の悪さを発露しているその人物に、誰もが言葉を失った。

そして僕も、瞠目する。

「――あの人は」

未だに色褪せない記憶。

憧憬の剣士をがむしゃらに追いかける切っかけにもなった、酒場での出来事。

ミノタウロスに追い回された僕を散々罵った、【ロキ・ファミリア】の冒険者だ。

名前は確か……ベート、さん？

「てめえらのせいで不味い酒が糞不味くなるだろうが。うるせえし目障りだ、消えやがれ」

鋭い目付きと剣呑な威圧感に、周囲の人間は顔色を悪くする。

彼に同伴している仲間の服に刻まれているのは道化師のエンブレム。都市最大派閥と名高い【ファミリア】の団員達、何よりその幹部である狼人の青年に、酒場の冒険者は萎縮させられた。

アイズさん達より遥かに粗暴で、刺々しく、けれど彼女達を前にしたような本物の空気を、

僕以外の人も感じ取っているようだった。



「ふん……がさつな。やはり【ロキ・ファミリア】は粗雑と見える。飼いだの首に鎖もつづられないとは」

そんな中で、あの美青年だけは、鼻を鳴らしてみせた。

口答をする彼に、ベートさんは琥珀色の瞳をほとほと億劫そうに向ける。

「ああ、蹴り殺すぞ、変態野郎？」

狼人とヒューマンの視線が交差する。

張り詰める場の雰囲気。しばし見据え合っていた彼等の内、先に視線を切ったのは美青年の方だった。

「興が削がれた」

そう言って、青年は身を翻す。

仲間に「行くぞ」と声をかけ、一人酒場の出入り口に向かった。よろめきながら立ち上がる冒険者達は、氣を失っている小人族の男を抱え、店の外へ消えていく。

最後の男がいなくなった後、酒場には静寂が残された。

(……助けて、くれた?)

美青年の一行を追い出した【ロキ・ファミリア】……ベートさんに、僕は何故かそんなことを考えてしまった。

ようやく血が止まった鼻を腕で拭いながら、軽い混乱を催していると……ずかずか、と。

狼人の青年は、真つ直ぐ僕のもとに歩み寄ってきた。

え、と固まる僕を他所に、酒場の客は左右に立ち退いてベートさんに道を開ける。腰を床についた格好の僕の前で、彼は足を止めた。

心臓が震える。笑い者にされ、容赦なく打ちのめされた当時の感情が一瞬蘇った。

アイズさん達の前で失意の底へ突き落としてきた相手に、何もできず凍りついていると、おもむろに伸ばされる左手。

手を差し伸べられた——なんて好意的に受け取る暇もなく、相手は僕の胸ぐらを勢いよく掴み、ぐいっと強引に引き上げる。

呼吸が止まった。

「——調子乗ってんじゃねーぞ」

顔を寄せられ、ギロリと。

目と鼻の先で凄みを利かされ、僕は、うんともすんとも言えなかった。ものすごい力で床から持ち上げられ、目を見張ることしかできない。

ベートさんはすぐに手を放し、僕を解放した。うぐつ、と床に墜落した鈍い痛みを腰をさすっていると、彼は反転し、不機嫌な背中を晒しながら酒場の外へ。灰色の尻尾は燃え立つ炎のように揺らめいている。

慌てる仲間の団員達は代金をカウンターに投げ入れ、彼の背を追いかけた。

美青年が率いる冒険者達に続き、【ロキ・ファミリア】まで、『焰蜂亭』ひばちていを後にした。

「何がしたかったんだ、あいつは……」

床に膝をつくりリリが心配し、体をさするヴェルフは呆れた言葉を店の出口へ向ける。リリの声にぎこちなく頷きながら、僕は側までやって来たヴェルフの視線を追った。先にあるのは開け放たれた酒場の扉、そして路地裏に続く闇夜だけだ。殴られた顔を手で押さえると、切れている唇がズキリと痛む。

打ち壊されたテーブルと椅子が散乱する店内で、給仕達が片付けを始めていく中。取り残された僕達を、何とも言えない空気が包み込んだ。

試し読み版はここまで！
続きは絶賛発売中の本編にて
お楽しみ下さい！

試し読み版

ダンジョンに出会いを求めるのは 間違っているだろうか6

発行 2014年11月30日 初版第一刷発行
著者 大森藤ノ
発行人 小川 淳

発行所 SBクリエイティブ株式会社
〒106-0032
東京都港区六本木2-4-5
電話 03-5549-1201
03-5549-1167 (編集)

装丁 ヤスダスズヒト
株式会社ケイズ (大橋勉/菅田玲子)

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

乱丁本、落丁本はお取り替えいたします。
本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを
することは、かたくお断りいたします。
定価はカバーに表示してあります。

©Fujino Omori

Printed in Japan

GA 文庫